

コインランドリーで待ち合わせ

村谷由香里

「俺コインランドリー好きなんだよね」

ぼつりと言ったタナベに、隣に座ったケシは眉間のしわを解かないまま、

「知ってます」

と面倒くさそうに応えた。

「コインランドリーの写真はつかり撮ってた」

「それもこの前聞きました。物好きですね」

横並びに一列、ずらつと椅子が並んでいる。その真ん中あたりに、ケシとタナベは並んで座っていた。

「お前は好きなの」

「好きでも嫌いでもないですよ、こんな場所」

ケシはそう言つてため息を吐き、ちらと一番端の椅子に座った男性の方に目をやった。男性はぼんやりと、稼働する洗濯乾燥機を見つめている。壁を埋め尽くす洗濯乾燥機のうち、右端のひとつがごうごう音を立てながら洗濯物を回転させていた。乾燥中のランプが残り時間を示している。残り十秒。あの椅子に座る男性の洗濯物だ。残り五秒。男性はゆつくりと一度瞬きをした。三、二、一、ピー。乾燥が終わる。

その瞬間には、男性の姿は跡形もなく消えていた。まる

いガラス扉の向こうにある洗濯物も、蒸発するように消えていた。最初から、誰もいなかったみたいだ。何もなかったみたいだ。

仕事を終えた洗濯乾燥機は、緑色のランプをせわしなく点滅させて洗剤切れを訴える。ケシは立ち上がり、洗濯乾燥機の洗剤入れを開けると、ストックしてあった洗剤を注いだ。

単調に作業をするケシも、それを見守るタナベも何も言わない。コインランドリーに、静寂が満ちる。

洗濯乾燥機のランプが消え、ケシはタナベの隣に戻ってきた。二人は一度目を合わせ、どちらともなく逸らす。ケシはタナベの手の中にある洗濯物の入ったビニールバッグに視線を移していた。彼が油断しているかとも思ったのか、そつと手を伸ばしてそれを奪おうとする。タナベは涼しい顔で、ひょいとケシの手をかわした。

「もう！ 何なんですか！」

ケシは地団駄を踏みながら立ち上がって、力づくで洗濯物を奪おうとタナベに攻撃を仕掛ける。タナベはうおおおと飛びかかってくるケシを交わし、ぽーんとバッグを放った。ケシは飛び上がってそれを奪おうとするが、バッグは二段重ねになった洗濯乾燥機の上に乗っかる。背の低いケシの手は届かない。ぐぬぬぬ、と悔しそうに唸り、タナベの方を振り返った。

「何なんですか！ 毎日！ ワタシをいじめて楽しいですか！」

「怒ってるねえ、カルシウム足りてないんじゃないの」

「違う！ アンタのせい！」

ケシは、叫んでタナベを指さした。

ケシはこのコインランドリーの管理人である。

機械のメンテナンス、洗剤の調達、掃除もろもろ、このコインランドリーに関することは全てケシに任されている。本来なら無人のはずのコインランドリーにケシがやってきたのはひと月前だ。コインランドリーにはひとつ大きな問題があつて、それを解決するために寄こされた。

その問題とは。

この、タナベという男だ。

「タナベさん解つてます？ ここのコインランドリーです

よ」

「うん」

「洗濯するところ！ 解ります？」

「うん」

「洗濯してくださいよ！」

「それは出来ない」

「なんですか」

「言つたじゃん。俺コインランドリーが好きなんだ。ずつ

とここにいたいんだよ。洗濯が終わったら、いられなくなつちゃうだろ」

ケシは頭を抱える。コインランドリーに来て、いつまでも洗濯機を回さず、ここに居付いた男をどうにかするのがケシに与えられた任務である。この男がどうしてここに居付いたのか、何故頑なに洗濯しようとしなのか、ケシには全く理解出来ない。

ケシは人間に生まれたことがないから分からないが、ここで洗濯するのが一番最後の人間たちの仕事だ。

人間は死んだ後、持つてきた洗濯物をここの洗濯乾燥機に入れる。そういう決まりなのだ。このコインランドリーの先に何があるのかケシは知らないが、きつと素敵なことが待つているはずである。少なくともここよりは良い場所に行けると思う。なのにここに居続ける理由は何なのか。

タナベに何度尋ねても、さつきみたいにはぐらかされるばかりである。

「ワタシ、アナタをどうにかしないと家に帰れないんですけど」

「それは、お気の毒に」

「うおおお」

ケシは飛び上がって洗濯物に手を伸ばす。届かない。タナベはそれを見てわはは、と笑った。もう一度高くジャンプして結局届かず、ケシはそこに置きっぱなしにしていた

洗剤のボトルを盛大にひっくり返した。タナベはさらに笑う。ケシは座りこみ「うあーん、もういやだよ」と泣きごとを言う。

「甘いんだよなあ、お前は」

タナベは言った。ケシは眉間に皺を寄せる。

「本気でやればいいのに」

「うるさいですよ」

このくだらない鬼ごっこが始まってひと月。初日こそ、洗濯物を奪い取って無理矢理にでも洗濯機に押し込んでやろうと思っていたケシだが、最近はそのルーティンワークになっていくらしいがある。一カ月の間、隙をつくことのできる瞬間なんていくらでもあったし、ケシもそんなに馬鹿ではない。では何故、ケシはタナベの洗濯物を奪おうとしないのか。

最初は好奇心だった。彼は何故ここに居座るのか。その理由を知りたいと思った。だからずっとこうして、隣に座って話を聞いて、退屈になったら身体を動かすことを繰り返していた。

そうしているうちに、何となくこの毎日にもこの男にも愛着がわいてきてしまっている。それもケシが鬼ごっこを終わらせられない理由である。口が裂けても言えないが、単なる好奇心とは別の思いで、ケシはタナベがここに居る理由を、知りたいと思っている。

ケシは立ち上がり、息を吐いた。

「ワタシは洗剤を調達してきます。タナベさんは床を掃除しておいてください。ああ！ もう！ ワタシが帰ってきたら今度こそ洗濯してもらいますからね！」

タナベはくつくつ笑いながら、一緒に脚立も調達してきたらいいよ、と言う。ケシはそれを無視してぶんすかと怒ったままコインランドリーを出て行った。

水溜まりの中の空中　く雲工場にてく

松下 和生

これは、まだ、水溜まりの中に空が、割かた多めに存在していたころの話だ。

ガタツと、部屋の奥の方から何かの均衡が崩れるような音がした。壮年の男性が、後ろ頭を掻きながらそちらを見る。眠そうな欠伸を一つ。

「これは、もはや、書庫だ」
一人こちる。

男の目の前に、数百、数千の書籍が整理され鎮座していた。日差しの届かぬ構造で、本が無為に痛まぬよう、室内は適度に乾燥していた。防音の仕組みがあるのか、部屋の荘厳さに雑音も息を潜めているかのようだ。十二畳の箱を照らすのは頼りない豆電球が二つで、隅の方にある読書スペースであろう所に小さな電気スタンドが一つあるばかりだった。

古いインクの香り、埃の匂い、なにより年月を経た紙の芳香が立ち込めている。

「……書庫だ」

もう一度、呟く。

先日、卒寿にて往生を遂げた祖父の家に男は来ていた。名目は形見分け。事実、手に負えない遺品整理の手伝いに駆り出されたのである。祖父は自他ともに認める読書家であり、蒐集家であつた。酒煙草を遠ざけて、書架の間を遊ぶ類の人間だつた。人となりと言えど厳格そのもの。幼少の頃、男は祖父の前で呼吸をするのにも氣を使つていたことを思い出す。苦笑ものだ、と思う。勿論、理由はあるのだ。そう。祖父はありとあらゆる雑音を、殊更煙たがつていた。木々のざわめき、鳥獣の鳴き声、衣擦れ、他者の足音。生物・非生物に関わらず、祖父の聴覚範囲で音を立てる総てを、彼は嫌つた。雑音がする方向に、ギョロリと鋭い眼光を向け、威圧する。大外の事柄はそれで片が付く。それでも鳴り止まぬ事象には、底冷えのするような恫喝が下る。

——五月、蠅い。

その声音は実に憎々しげで、まるで自身から発せられる音すらも嫌っているかのようだった。その為、恫喝の結果がどうであれ、祖父は四文字以降の言葉を絶対に発しない。許されるのは、唯一、頁が捲られる紙と紙が擦れる音だけなのである。

苦手だった。

一族の総意だっただろう。挨拶さえも拒絶するような人間に、親愛の情などなかなか湧かない。親戚一同はそう思っていたし、祖父も当然それを理解していた。だから、いつも彼は「ここ」にいたのだ。祖父は気難しい人間だったが、悪戯に和を乱すような愚かな人物でもなかった。社交の場はそれを好み得意な祖母に任せ、自分が出番がない限り家屋の最奥、静寂の書庫にいつも引つ込んでいた。

祖母は明るく温和な人物であり、祖父も雑音以外に他者を咎めることはなかった。そんな事情からか、祖父の家には親類の集まりは良かったのだ。男も幼少のころ、よく両親と共にこの家を訪れたものだ。

「どうかしら、ヨシハル君。片付きそうかしら？」

回想に耽っていた男の背後から、不意に声がかかる。

「ん、ああ、お祖母さん。すいません。今更ながら、本の量が圧倒されています」

「そうよねえ。数えたことはないけれど、とても沢山あるのじゃないねえ」

バツが悪そうに答える男に、祖母がけらけらと笑いながら書庫に入ってくる。祖父とは十近く年齢が離れていて、尚且つ現在も丈夫な足腰を持つ祖母は、立ち振る舞いが随分若い。七十後半にして社交的で、気に入った流

行にだけ乗るスタンス。気ままで、明るく、それでいて筋の通った女傑である。

「これだけあるのだから、すぐに片付くとは思っていないわ。でも、取り敢えず、ヨシハル君には話を通さなきゃなと、そう思っていたから」

「僕に話を通すこと、必要ですか？」

本は好きだが、親戚で知れ渡るほど読書家ではない。まあ、それはこの書庫の持ち主に比べれば、大概のものは大したことではないのだが。そう彼は思う。

「あら。覚えていないかしら？」

祖母が悪戯っぽく微笑む。

「当時……から、現在に至るまで。あの人だけの場所。この陰気な箱庭に、ずいずーいって入り込んだのは、後にも先にもヨシハル君だけだもの！」

男の眉間に皺が寄る。

「ええと、ああ、ううん」

祖母の話に、いまいち合点がいつていない様子である。腕を組んで、首を傾げる。思い出せない。思い当たる節がない。その様子を見て、祖母はまたけらけらと笑った。「いいの。いいの。そんなに深刻に考えなくても」

そうして、彼女は薄暗い室内をぐるっと見渡した。男は何かを弁明するべきだと思った。二の句を継ぐようにして、少し考えて、やつぱり止した。書庫を見渡す祖母の

目線に値するような言葉を、男はまだ知らないと感じた。

男はのんびりと本の物色を始めた。

暖かで、しかし切なげである。愛おしく、でも憎らしくて。近しいようで、けれどどうしようもなく、遠い。

そんな感情群が、途方もない長い年月のうちに、ぐちゃぐちゃになり、あるいは調和する。やがて切迫した馬鹿馬鹿しさとして、苦笑いと共に「それら」は溜め息になったりするのだ。祖母はこの書庫に、さらに先に透けて見える祖父に、そんな類の愛情を以って接していたのだろう。

「まあ、あの人……ヒロノリの最後の我儘だと思って、もう少しだけ見て行ってくれないかしら？」

困ったような顔で、祖母が笑う。そんな複雑な感情の発露に、彼は器用に対応する術を持ち合わせない。なので、断れるべくもないのだ。

「はい。いや、そのつもりで時間作って来たので、かしくまらないでください」

「——有難う。欲しいモノがあったら、勝手に持って行っていいからね」

一度、誰にでもなく頷き。祖母はあっけらかんとした様子で、書庫を後にする。

残されたのは男と、大量の書籍だ。

首を左右にじつくりと傾ける。目をじつと閉じて、ゆつくり開く。これら一連の動作を二・三度繰り返した後、

漂泊

なじみちか

四年前の、夏の話だ。

うん。僕は中学一年生で、だから、これから話すのは僕の中学最初の夏の話だ。

そうだね。確かに、真冬にするような話じゃないかもしれない。

いいんだ。実感のない方が話しやすいこともあるよ。思い返してみても、夢だったんじゃないかと思えてくることがある。猛暑の熱に浮かされて見た蜃気楼だったんじゃないか、てね。

けど、あれは紛れもない現実だった。

蝉時雨が喧しかった。入道雲が浮いていた。項垂れるほどに暑かった。

何のことない、毎年やってくるありふれた夏だ。でも、僕にはありふれた夏じゃなかった。

終業式が終わって夏休みが始まったあの日、僕は射光橋に向かっていた。僕の住んでいた家から三キロ近く離れた辺境に架かっている橋だ。光射す橋で射光橋。ボロい橋じゃない。しつかりした石橋で、長さなんて三十メートルもないし、軽自動車が一台通れるくらいの幅はある。でも、橋に着いた僕はすっかり意気消沈して、震え上がっていたよ。

――絶対に渡るな。

そう言われてたんだ。一度や二度じゃない。幼い頃、物心ついた頃から言い聞かされてた。間違っても射光橋を渡るなんて考えるな、あの橋は卑しい奇人共と我々を分かち橋だ。言いつけを破って橋を渡ったりなどしてしろ、二度とこっちは戻れないからな。大人たちは口を揃えた。

そんなわけがあるかと思った。いつも首肯を返しちやいたけど、まるで信じてなかったな。こどもに恐怖心を植えつけて、自分たちは大人の庇護がなければ生きていけないと思ひ込ませるためのうちあげと決めつけていた。

当時の僕は十二歳で、中学一年生で、反抗期だった。いつまでも従順なこどもじゃないと思ひ知らせてやりたかった。

だから、渡ってやろうと決めた。

それだけ大見得を切ったのに、どうしても足が震えた。言霊は恐ろしいなと思ったよ。幽霊なんぞいやしいと思っけていても、夜の墓場で大暴れなんて真似はできないだろう？ そんなことをしたら祟りに遭うとみんなどこかで言い聞かされてるんだ。

悔しいけれど、大人の言いつけは確かな言霊になって僕の足を鈍らせていた。たった三十メートルの石橋が、巨大な怪獣の背に見えた。

それでも、一歩踏み出した。結局、僕を踏み出させたのは反抗心か、あるいは意地だったのかもしれないな。

最初の一步を乗り越えたら後は勢いだ。もう引き返せないと言ひ聞かせて、震える足に鞭打った。

氣付けば橋を渡りきっていたよ。

振り返ってみたら、なんてことないただの石橋に見えた。なんだか拍子抜けしたよ。周りの大人が急にちっぽけに思えたな。

橋の向こうは光導ひくどうと呼ばれていた。光に導くで光導だ。光導に架かる橋だから、射光橋と言ふのだな。

これまで茂る木々に覆われて見えなかった光導の景色が、妙に新鮮に見えたのを覚えてる。ただの開けた田舎の風景がどこか特別なものを切り取ったように思えた。建物なんてほとんどなかったけど、遠い盆地の中心に真つ白な建物があった。僕の通っていた中学校なんて相手にならないほど巨大な、遠近感がおかしくなりそうな建物だった。

あれが光導院だと思った。光導の奇人たちを隔離する施設だつてどこかの主婦が話すのを聞いたことがあったんだ。

片田舎の風景に、光導院はとてつもなく異質に映った。外壁は真新しさすら感じさせる綺麗な白なのに、なんて言うんだろ、長い年を経た建物にしかない独特の雰囲気纏っていた。

いや。光導院には行かなかったよ。

間近で見たことはあるけれど、中に入ろうとは思わなかった。ずっと見ているだけだったな。

最初の日なんかあんまり見過ぎて足元を疎かにしてね。見事にすつ転んだ。痛いには痛かったけど、それ以上に恥ずかしかった。難所の橋を渡りきった直後に転ぶなんて、油断大敵そのものだ。

しかし、そんな羞恥心も直後にはぶっ飛んだ。

「どうしたの」

本気で死を覚悟したのは後にも先にもあの時だけだ。

一瞬で背筋が凍った。光導の奇人に違いないと思つた。

——二度とこちに戻れない、大人の言葉が脳裏を駆けた。即座に立ち上がって一散に逃げ出す自分を頭思い描いたけど、まるでだめだったな。足が言うことを聞かない。

結局へたりこんだまま、びくびく竦み上がっていた。

「大丈夫？」

奇人が二の句を継いだ。真夏の熱視線なんて忘れるほどに恐ろしい二つの視線が僕の背中を刺していた。恐ろしさのあまり、失禁してしまひそうだった。

どうすれば生き残れるか、脳味噌を混ぜて返して思考能力の全てをそこに注ぎ込んだよ。

どうしたと思う？

うん。なるほど、君ならそうしたかもしれない。

実際？ そうだな……。

僕はね。考えに考えた挙げ句、死んだふりをしたよ。

あ、笑つたな。嘘言え。それが普段の顔つていうなら僕が話してる時だけ無愛想つてことになるぞ。

本当に悪いと思ってるのか……。

まあ、確かに無理が過ぎたことを認めるにやぶさかじやない。十秒前まで生きて走り回っていた人間が転んだだけで死んでたまるかって話だ。当時の僕は自分の頭脳を買いかぶりすぎてはいたけど、さすがにそこまで馬鹿じゃなかった。しかし、恐怖は思考を捨てさせる。どう考え^{ても}無理があるだろうという心の声に対してさえ、僕は思考放棄をした。

そしたら、体を揺さぶられたよ。奇人の手に違いはないはずんだけど、手つきが妙に優しくてね。本当に心配そうな声を出すものだから、もしかしたら大丈夫かも、なんて甘えた考えが頭をもたげて、うつすらとだけまぶたを持ち上げた。

眼前数センチの距離に吸い込まれそうなほど大きな瞳があった。心臓が止まるかと思った。驚愕も一線超えると声も出なくなるんだな。

「よかった。何かの発作かと思った」

奇人は女だった。立ち上がる彼女の様を、僕の目が追っていた。

恐怖で感覚が麻痺していたのかな。なぜか、彼女を見る瞳が自分のものじゃないように感じた。恐ろしいと聞かされていた奇人のことを、ガラス越しに観察するような感覚で見えられたよ。

彼女は制服を着ていた。半袖のセーラー服に、青い衿が涼しげだった。胸元には真っ赤なスカーフをつけてい

てね、それが、胸のまるみに押し上げられてものすごい傾斜を作ってた。

そんな顔をするなよ。当時の僕が抱いた印象をそのまま言ってるだけだ。……それは僕を買いかぶりすぎて。すぐにのぼせ上がる、どこにでもいる馬鹿な中学一年生だった。

僕の中学にはよつぴー先輩っていう人がいてね、よつぴー先輩の胸がかいなんてクラス男子がよく話題にしてたけど、そんなもん所詮中学レベルの「でかい」に過ぎないと思ひ知ったな。見聞の狭い中学一年生の目だから実際以上に大きく見えてもいたんだろうけど、目の前の奇人の胸はよつぴーなんかぶつかっただけで死ぬくらいのおくらみを蓄えていた。たぶん僕より四か五くらい年上だ。肩甲あたりまである髪が、太陽の白い光をたつぷり吸ってカラスの濡れ羽のように透き通っていた。蝶み^{たい}な白いリボンで、髪を左に結っていた。

本当に、これが噂に聞く恐ろしい奇人なのかと思った。正味な話全然そうは見えなかった。もつと正直になれば、少しだけ綺麗かも、なんて思っていたよ。そよ風に揺れる青いプリーツスカートにどぎまぎして、思わず目を逸らした。日に焼けていない太ももが白かったことを覚えてる。

「どうしたの。立てない？」

恐怖心は消えていた。羞恥心が消えて、恐怖心も消え失せると、次に芽生えたのは反抗心だった。こども扱い

されてると思ひ込んで、なんともない、なんて強がつて、そんな振る舞いがこども染みているなんてことにも氣付いていたけれど、氣付いていてもどうにもできないこともあった。

無理に立ち上がろうとしたら頭がふらついた。あわや二度目の転倒というところを、彼女に抱き止められた。

「大丈夫？」

とても大丈夫じゃなかった。咄嗟に飛び退いたけど、抱き止められた時の感触はしつかり額に残っていたよ。夏の日差しが急激に熱を上げた氣がした。

彼女は、僅かばかり腰を落とすと首をかしげるようにして僕の顔を覗き込んだ。

「初めて見る顔だね。はじめまして。私、しるべ」

聞いてもないのに自己紹介をするものだから、つられて僕も名前を名乗った。

「……おれ、外垣圭斗」

——ん。ああ、うん。その頃は「おれ」って言ってたよ。理由？ さあ、どうしてだろう。背伸びしていたのかな。男にしては髪がちよつとばかし長くて童顔だったから、女の子と間違われることがたまにあった。だから、より男らしい「おれ」を使つてたのかもしれない。

まったくだ。全然男らしいなんて柄じゃない。

しかも「おれ」と言つたにも拘らず、しるべは最初僕のことを女の子と勘違いした。ケイトなんて名前だから女の子かと思つたそうだ。どう見たつて日本人なのにな

んでそうなるのかと圭斗って字を教えたなら、彼女はふんふん頷きながらしるべの字を教えてくれた。

「圭斗くん。私はね、記録の記にカタカナのべで、記べ」

——そう。僕は、今の君と全く同じ反応をしたよ。記べなんて妙な字面、何かの暗号にしか見えないしヘタしたらキベとしか読めない。そもそもひらがなとカタカナのべはどう違うのか。

妙ちきりな名前だから氣になつて住まいを聞いてみたら、やっぱり光導院に住んでいた。噂に聞く奇人に違ひなかったつてわけだ。

「圭斗くんはどこに住んでるの？」

素直に橋の向こうと答えたら、記べは目を小豆みたいにして「橋の向こう？」と繰り返した。驚いているようだったけど、怯えてる風にも見えな。光導の方でも、絶対橋の向こうに行くなと言ひ聞かされていたのかもしれない。

自分は橋の向こうから来たものだから、得意になつていたんだろうな。からかい混じりに「こわいの？」と聞いたなら、記べは不安そうに左の肘を掴んで、俯きがちに頷いた。

「こわくなんてないよ。誰も取つて食つたりなんかしないつて。渡つてみる？」

こどもの悪戯心だな。さつきまで記べに怯えていた自分と立場が逆転したようで、幼稚な嗜虐心が芽を吹いた。「大丈夫だって。ほら、行つてみようよ」

記べの細い手を取ろうとした瞬間、甲高い音が鳴った。調子に乗った罰が当たったんだろうな。

何が起きたのか、すぐには理解できなかった。記べが、青褪めた表情で僕の手を見つめていた。呼吸は乱れていたし、瞳孔も縮み上がっていた。僕も鏡写しに同じ表情をしていただろう。

遅れてやってきた痛みと、まだ木霊している甲高い残響が、伸ばした手を打ち払われたんだと教えてくれた。

——やり過ぎた。気付く時には決まって手遅れだ。急激に熱が冷めていく感覚があった。謝るべきか、そう思った一瞬に口は開いたけれど、出てきたのは音を持たない息だけだった。

記べは戸惑いの色を眉に表わして、左の肘に右手を添えて、何か言おうとしていた。

即座に、背中を向けて逃げ出したよ。

自分にこそ非があると自覚していたんだろうな。記べの口から出るのが謝罪の言葉ということもおよそ察していたんだろう。一瞬謝罪を躊躇ってしまった自分の小ささを思い知らされるのが嫌だった。

逃げ足が射光橋を踏んだ時にはとつくに息が上がっていた。

「射光橋を渡ったら、二度とこちには戻れないからな……」

何度となく言われ続けてきた言葉が、口を突いて出た。

「……ばっかみたい」

思考の内から記べを追い出したいくて、わざと声に出して呟いた。そんなことしなくても、直後には記べのことなんか忘れる衝撃に襲われることになるのに。

「帰ろう」

また呟いて、歩を進めたその時だった。背後から、
「もうお帰り？」

飛び上がった。着地する前に女の声だったと頭が認識して、それなら記べに違いないと決めつけた。橋を渡れないと馬鹿にされたのが癪で追いかけてきたのだ。

そんな筋を勝手に作って動転しながら振り返る。

誰もいなかった。

「ここよ」

今度こそ身が竦んだ。声は耳元から聞こえたんだ。どころか、見えない何かに頬を突かれた。

気が気じゃなかった。半狂乱の有り様になって、こけつまろびつ橋をわたると勢い任せに山道を降りて自宅に帰った。

逃げ出す寸前、確かに「またおいで」と聞こえた。二度と行くかと思つた。